



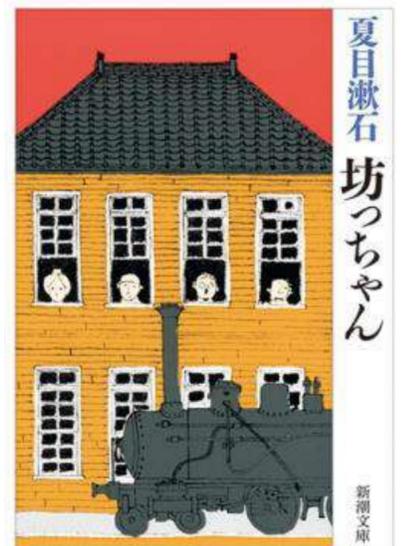
カスタネット通信7月号は6月23・24日に愛媛県松山市で開催された、第24回日本言語聴覚学会の報告Part1です。

夏目漱石『坊っちゃん』

「親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりしている。小学校に居る時分学校の二階から飛び降りて一週間程腰を抜かした事がある。」夏目漱石の小説『坊っちゃん』の冒頭です。私たち言語聴覚士にとっては、補聴器の装用効果を判定する評価方法である「補聴器適合検査の指針(2010)」に含まれる「環境騒音の許容を指標とした適合検査」で使用されている文章としてお馴染みです。'駅プラットホーム'、'幹線道路'、'レジ袋'、'食器洗い'の騒音が聞こえている状況下で、坊っちゃんの一節が朗読されており、補聴器を装用した状態でその朗読を聞いていられるか(騒音が許容できるか)を評価する検査です。朗読の材料になぜ坊っちゃんが選ばれたかは知らないのですが、「坊っちゃんだなあ」とだけ思いながら聞いていました。「坊っちゃんだなあ」ということは分かるのですが、実は今まで一度も読んだことがなく、今回愛媛の学会をきっかけに初めて読んでみることにしました。

「坊っちゃん」の主人公'坊っちゃん(おれ)'は、東京理科大学の前身である物理学校を卒業後、数学の教師として'四国辺のある中学校'に赴任します。注解には、'夏目漱石自身も松山中学校で英語教師として教鞭をとっており、小説に登場する温泉は如何にも道後温泉を思わせるが、松山と直接繋がるような固有名詞は避けられている'と書かれていました。坊っちゃんは結構毒舌で、折りあるごとに東京と比べて「田舎者の癖に人を見括ったな」とか、「二十五万石の城下だって高の知れたものだ」とか、悪態をついているからでしょうか。また120年近く前に発表された小説だからなのか、注解が異常に多いと感じました。「勘当」「宿直」など純粹にことばの意味を説明しているもの、「麻布の連隊」「日露戦争」など歴史的なことを説明しているもの、「そりゃ聞こえませんか伝兵衛さん」「汐酌み」などそれぞれ浄瑠璃や歌舞伎舞踊に関連する文化的な説明などがなんと25ページに渡って注解として書かれています。*(アスタリスク)を見つける度に後ろの注解を読むため、ページを行ったり来たりする必要がありました。その説明はいるかね?と思うものもありましたが、'江戸時代は庶民が玄関を作ることは許されていなかった'ことや、'当時、現在の東京駅はまだなく、新橋駅が東海道線の起点だった'ことなど、時代背景を知って読むと、より奥深く理解できるものもありました。

狸、赤シャツ、野だいこ、山嵐、うらなり、坊っちゃんが同僚の外見や性格からつけた渾名からその人物像がイメージがしやすく、主人公の坊っちゃんが聖人君子の魅力的な人ではない、というところも面白さの一因でしょうか。また、生徒たちのいたずら、他人の恋人を奪おうとする輩、自分に有利に事が運ぶような裏工作、十分確認せず誰かの話だけを聞いてそれを鵜呑みにすると大変なことになるという教訓、100年以上も経った今の世の中にも通ずるところがありました。そのためか、教師の月給が40円だったり赴任先まで汽車や汽船を使うところなど、歴史は感じましたが、読んでいて古くさは感じませんでした。たった数カ月の間に目まぐるしく起こる出来事、勧善懲悪のようでそうではないストーリーに引き込まれ、あっという間に読み終わりました。

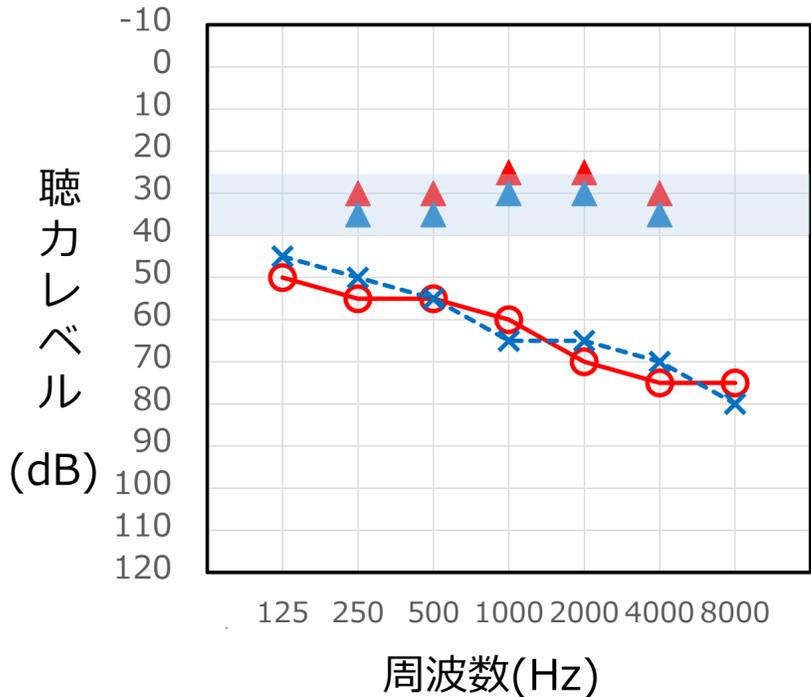


 カバー装画は安野光雅さん



おぎはら耳鼻咽喉科では、日常生活で聞こえに問題を感じ、補聴器試聴を希望される方に対して補聴器を調整する補聴外来があります。補聴外来では、ひとりひとりの聴力、生活環境、手指の巧緻性など様々な状況を考慮して、適切と思われる補聴器を数種類用意し、日常生活で使用していただいたのち、ご自分の補聴器を選びます。

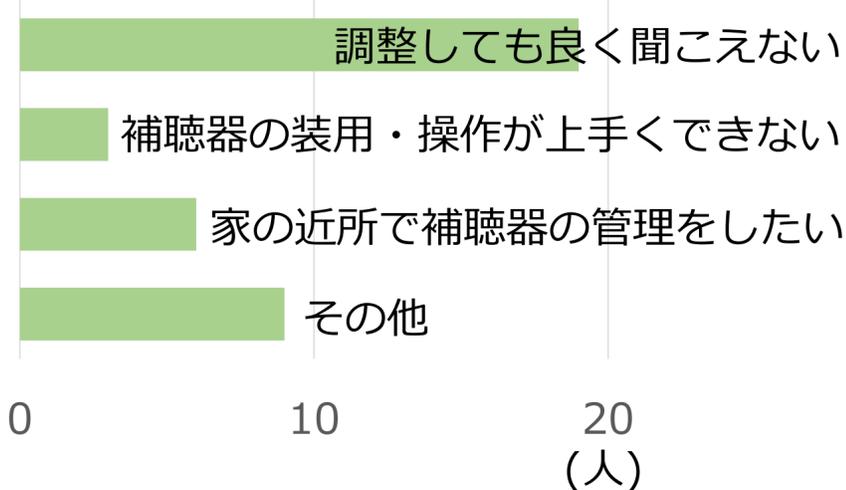
左下はオーディオグラムといって聴力検査の結果を記入するグラフです。



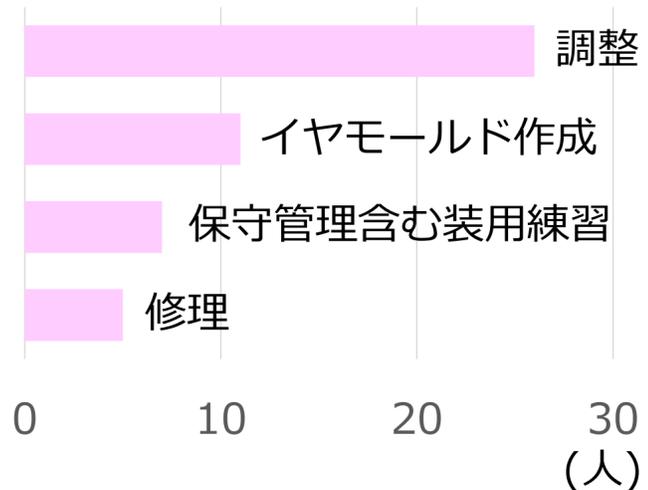
縦軸が音の強さ、横軸が音の高さを表しています。○が右耳、×が左耳の聞こえを表し、○×の記号がグラフの上にあるほど聞こえが良いということになります。元々の聴力にもよりますが、補聴器を装用した時の聞こえ(▲右耳、▲左耳)が■の中に入るように調整すると、ことばが聞き取り易くなると考えられています。

さて、おぎはら耳鼻咽喉科には眼鏡店や補聴器専門店で購入した補聴器を持っている方も受診されます。今回の学会では、このような方々の**受診理由**や**補聴外来での対応**を調べて報告しました。一部内容をご紹介します。

受診理由(複数回答)



補聴外来での対応(重複あり)



左上の棒グラフに示しましたが、補聴器は持っているが“良く聞こえない”方や“操作が上手くできない”方が多くいました。そのような方々の補聴器を調べたところ、先ほどオーディオグラムで示した▲▲が■内に入っていないことが多かったため、補聴外来で再調整をしました。また、補聴器の清拭などの保守管理を含め装用練習を行いました。

受診理由の“その他”には“コロナでお店に行かなくなった”というものがありませんでした。この数年はコロナ禍で補聴器店や病院から足が遠のいていた方も多いのではないのでしょうか。補聴器は購入後も、聴力の変動がないか、補聴器自体に修理が必要な不具合が起きていないかを調べるために、定期的に耳鼻科に通院し耳内の状態や聞こえのチェックをする、補聴器の点検をする、などが重要です。

“その他”には、地域包括支援センターの職員や知人に当院を勧められたという方もいらっしゃいました。皆様の周りに聞こえでお困りの方がいらしたら、ぜひご紹介ください。



↑会場の愛媛県民文化会館前で



学会報告はPart2(8月号)に続きます！



おぎはら耳鼻咽喉科